

オフサイドとか ダンクシュートとか 「サッカーと資本主義」

柳 宣宏

(三省堂国語教科書編集委員)

この文章は、「サッカーは、資本主義を―その後進性において―代表しているのだ。」という一文をもって終わる。サッカーを愛する者にとつては、いささか気になろう。ちなみに文章の冒頭の文は、「サッカーに関する最大の社会学的謎は、アメリカ人はなぜこのスポーツを好まないのか、ということである」。

シュートのパフォーマンスが決まった時くらいである。シュートを決めたプレイヤーもその仲間たちも、ゴールを決めるや否やさつさと自陣に帰ってゆく。気持ちの半分はシュートを防ぐあるいはリバウンドを奪うために。残りの半分は得点された後にすぐに点を取り返すために。バスケットボールの観客が最も興奮するのは、僅差のまま迎えた第4クォーターの残り一分だ。短い時間のうちに、どれだけ得点を重ねて逆転することができるのか。始まりから終わりまでの過程を限りなく無に近づけ、より多くのゴールを決めようとするプレイヤーに観客は感情移入する。

「入れろ、もつと入れろ。」

ある」。USAに相撲がないのは考えなくてもわかる気がするが、考えたなら彼我の文化論になるくらい面倒な気がするけれど、アメフトがあんなに流行っているサッカーの人気のないのは、確かに謎と言つていいだろう。

サッカーの試合を見て一番興奮がめなのが、ボールがキーパーの懸命のセイヴィングを逃れてゴールネットを揺らした後に、南の国の律儀な交通警察を思わせる短パン姿のラインズマンが、小旗を高く上げて得点の無効を宣言する時だ。サポーターの歓呼が一転して落胆の嘆息に変わっても、彼の表情は変わらない。ピッチに立つことも、サポーターの中に入ることもできない。

彼が、自分を疎外した人間に復讐しているのではないかとすら思われる。オフサイドの反則を知らせるかの小旗は、だれも逆らえない点において、遠山金四郎がもる肌脱いで見せる桜吹雪の刺青よりも絶対的な価値を持つ。

一方、バスケットボールでは、ゴールが一回くらい成功しただけでは、歓呼の声は上がらない。歓声が上がるのは、ダンク

サッカーがオフサイドによってたびたびゴールの機会を阻害されるのに対して、バスケットボールは無限に得点することを求められる。サッカーは南米・アジアといったヨーロッパ諸国の植民地であった地域、ということは世界をほとんどカバーしてしまう、そしてヨーロッパで隆盛を誇るのにかかわらず、アメリカではバスケットボールよりも人気がない。

初めに戻るけれど、どうしてなのか。筆者の大澤真幸は、発達した資本主義の反映か、遅れた資本主義の反映かの違いだと述べる。けだし資本主義とは、始まり（投資）から終わり（回収）までの過程が繰り返されるシステムであり、その過程の繰り返しされる回数が多いほど得られる利潤も多いのであった。これ以上詳しいことはぜひ本教材を読んでください、オフサイドがどうして生まれたかも含めて。

やなぎ のぶひろ 湘南白百合学園中・高校教諭。